

第

化學

數冊 號記 號冊

三 一 三

學 縣 游  
校 中 賀

第

化

430

841

Vol. 3

刺繡

小學化學書

三

彦根公立校  
印第十九章

小學化學書卷三

市川盛三郎 譯

第五十三回 鐵及其用方及性質

鐵 鑛屬中ニテ主要ナル者ヲ論スルハ宜シク

先鐵ヲ舉グベシ何トナレハ鉄ハ諸鑛屬中最要

用ナル者ナレバナリ若此世界ヲ見テ鉄ハ地球

ニ又ハ人ノ風俗必常ニ野蠻タルヲ免レヌ何ト

ナルハ鉄道ノ便ナル諸多機關ノ巧ナル鉄管ノ

小學化學書 卷三

炭氣ヲ送リ若シクハ水道ヲ通スルヨリ日用ノ  
刀及及小器具ニ至ル迄皆應用スルコトヲ得サ  
レハナリ上古ノ人蓋未鋳アルヲ知ラス是此物  
天然純鐵トナリテ生スルコトナク常ニ石ノ如  
キ朴鐵トナリテ産シ且其内ヨリ純鐵ヲ得ルコ  
ト容易トラサルニ由ルナリ此ノ如キ時代ニ在  
テハ人皆銅或ハ青銅カウヤブヲ以テ諸道具ヲ造リ蓋古  
ナレハ石斧石刀等ヲ用井タルナリ○鐵ハ朴鐵  
中最要用ナルハ酸化鐵ナリ乃炭火ヲ以テ之ヲ  
灼テハ其酸素離レ去テ鈍鐵ヲ殘スナリ之ヲ鍛

鐵ト云フ此物熱シテ赤色トナルニ至レハ鍛ヒ  
鍊テ馬沓釘鋤鍬及車ノ外輪等ヲ造ルコト意ノ  
如クナラスト云フコトナリ且之ヲ撃チ延シテ  
板トナシ蒸氣ノ釜若シクハ船ヲ造ルニ用井ル  
又此鐵ノ最要用ナル性ハ其兩片ヲ取テ強ク熱  
シ之ヲ合セテ鎚撃スル片ハ固ク粘着シテ復離  
ルハコトナキナリ其他又鑄鐵ト云フ者ナリ其  
要用ナル亦鍛鐵ニ亞ク之ヲ熔セハ模型ニ鑄入  
シ諸器ヲ製作スヘシ水道及炭氣管鐵柵太車輪  
重器械ノ臺等皆此物ニ由テ造ルナリ○鑄鐵ヲ

製スルハ其礦石ト石炭ト石灰石トヲ高大ノ窯  
ニ入レ先ツ其石炭ヲ燃シ鼓鞴ニテ強キ風ヲ吹  
キ入レ其鉄ヲ熔シテ型中ニ鑄入スルナリ。  
鑄鉄ノ性ハ鍛鉄ト異ニシテ之ヲ熱シテ打延ハ  
シ板或ハ竿トナスコト能ハス是此物ハ甚脆ク  
シテ鎚ヲ以テ之ヲ打テハ破レ碎クルコト恰モ  
玻璃ノ如ナレハナリ且鑄鉄ハ純粹ノ鉄ニ非ス  
其内多ク炭素ヲ含メリ是製煉ノ間ニ之ヲ石炭  
ヨリ得ルナリ故ニ方ヲ設ケテ其炭素ヲ燃シ去  
レハ變シテ鍛鉄トナスコトヲ得ルナリ○更ニ

又一種鋼鉄ト名ツクル者アリ剃刀、小刀及其他  
一切ノ刃物ト造ルニ用イル是其強クシテ且堅  
ク又之ヲ礪テ利刃トナスコトヲ得ル故ナリ鋼  
鉄モ亦少シク炭素ヲ含ムモノニシテ之ヲ製ス  
ルハ鍛鉄若シクハ鑄鉄ヲ以テスルモ亦皆可ナ  
リ

鉄ハ酸素或ハ大氣中ニ於テ燃セハ酸化鉄即鉄  
錆トナル又鉄ノ切片ヲ磨キ濕氣ヲ帶フル所ノ  
大氣ニ曝スモ亦皆同物ヲ生スルナリ  
第四十四試 試管ニ鉄屑少許ヲ入レテ稀硫酸

第三十五圖



ヲ注キ加フレハ一種ノ氣ヲ發ス  
 其初出ツルコト緩カナリト雖モ  
 少シク試管ヲ熱スレハ速ニ發シ  
 直ニ管口ニ火ヲ點レテ其氣ヲ燃  
 スコトヲ得ヘシ是鍍已ニ酸ニ溶  
 ケテ硫酸鍍即綠礬トナリ且其硫  
 酸中ノ水素ヲ發スルナリ既ニレ  
 テ水ヲ試管ニ加ヘ濾紙ヲ以テ其  
 液ヲ濾セハ大抵無色トナル之ヲ煮詰メテ後ニ  
 又冷セハ綠礬ノ結晶ヲ得ヘシ

第三十六圖



又綠礬ノ溶液少許ニ一合許ノ水ヲ加ヘテ稀薄  
 トスルモ尚其内含ム所ノ鍍ヲ試験マルコトヲ  
 得ヘシ乃硝酸二三滴ヲ其内ニ加ヘ石口シヤン  
 ポダレユハト記シタル所ノ瓶ヲ取り其二三滴  
 ヲ加フレハ忽青色トナルニテ知ルナリ

第五十四回

アルミニウム即粘土ノ元素

アルミニウム 鍍ノ次ニ此鍍ヲ論スルハ其之

ヲ粘土ヨリ取ル者ニシテ諸ノ岩石中多ク之ヲ

含メハナリ此物ハ恰モ銀ノ如キ光澤アル白キ

鍍ナリ其之ヲ通常ノ粘土ヨリ製シ出スコトヲ

得ルハ殆信シ難キカ如シ然レ氏化學家ハ實ニ  
此技巧ヲナスコトヲ得ルナリ且此鑛ハ實ニ美  
麗ナル光澤ヲ具フルモノニシテ粘土亦地トレ  
テ之ヲラセセルハナク之ヲ得ルコト至テ易シ故  
ニ若容易ク之ヲ製スルコトヲ得ハ種々ノ工技  
ニ用井テ甚便利ナルヘシ然ルニ粘土中ノ酸素  
ヲ分チ除テアルミニウムノ純鑛トナスコト極  
メテ難ク費用極メテ大ナルハ實ニ憾ムヘキコ  
トナリ此鑛ヲ大氣中ニ於テ熱スレハ燃エテ酸  
化物トナリ即之ヲ礬上ト云フ是粘土中ニ存在  
スル者ナリ○明礬中亦此鑛ヲ含メリ

第五十五回 石灰ノ元素

「カルシウム」亦甚純粹ノ鑛トナシ難キ者ナリ  
但其化合物ハ極メテ多シ乃石灰ハ其酸化物ニ  
シテ大理石石灰石珊瑚等ハ炭酸「カルシウム」石  
膏ハ硫酸「カルシウム」骨中ノ土分ハ磷酸「カルシ  
ウム」ナリ故ニ此鑛ノ多ク地中ニアルコト推テ  
知ルヘシ

第四十五試 白堊ト塩化水素酸トヲ以テ炭酸  
ヲ製シテ其瓶中ニ殘ルモノハ塩化「カルシウム」

、溶液ナリ故ニ之ヲ濾シ其透明ノ液ヲ煮テ全ク水合ヲ蒸散スレハ白ク乾キタル粉ヲ殘ス之ヲ塩化「カルシユム」ト云フ此物好テ濕氣ヲ吸取ス乃第二十試ニ於テ水素ヲ乾シ且其已ニ水トナリタル者ヲ聚メ取ルニ用井ルモノ是ナリ今其紛末ノ乾ケルモノ少許ヲ取り暫時大氣ニ曝セハ遂ニ溶流シテ液體トナルは大氣中ニハ常ニ濕氣アルヲ以テ其之ヲ吸ヒ取ルニ由ルナリ今塩化「カルシユム」少許ヲ試管ニ入レ水ヲ加ヘテ溶シ炭酸「カルシユム」ノ溶液ヲ加フレハ此二液

初ハ透明ナレトモ相合シテ忽濁ヲ生スルヲ見ル是炭酸「カルシユム」ヲ生シ其性ハ塩化「カルシユム」ト異ニシテ水ニ溶ケサル故自キ粉トナリテ沈ムナリ此ヲ如ク溶ケサル物ヲ生シ其液中ニ沈ムヲ沈澱ト云フ今其模様ヲ示スコト左ノ如ク

初用井タル物

塩化「カルシユム」水ニ溶ケ易キモノ

炭酸「カルシユム」水ニ溶ケ難キモノ

此ニ溶液ノ合シテ得ル物

炭酸「カルシユム」水ニ溶ケ難キモノ

塩化「カルシユム」水ニ溶ケ易キモノ

是ニ由テ同ニ鑛屬ノ塩類ト雖モ或ハ水ニ溶ケ  
難キコト炭酸「カルシウム」ノ如ク或ハ水ニ溶ケ  
易キコト塩化「カルシウム」ノ如キ者アルヲ知ル  
可シ但此ノ如ク二物ヲ混スルモ全ク新ナル物  
ヲ生ストス可ラス何トナレハ唯化合物中ノ諸  
分互ニ交代スルノミナレハナリ乃此試験ニ於  
テ炭酸「カルシウム」ヲ得ルハ初用井ル所ノ二物  
中其之ヲ生スヘキ諸分既ニ全ク具ハルヲ以テ  
其相混シ觸ル、ニ方テ交代シテ之ヲ生スルナ  
リ

第五十六回 瀉利鹽ノ元素

「マグネシウム」ハ銀ノ如キ白キ鑛ナリ此物柔ニ  
シテ細線或ハ薄片トナスヘレ  
第四十六試 長四五寸程ノ「マグネシウム」ノ線  
ヲ取り燈火ヲ以テ其端ヲ灼クハ忽火ヲ引テ燃  
エ烈シキ白光ヲ發シ白キ粉ヲ殘ス此粉ハ酸化  
「マグネシウム」ニシテ之ヲ「マグネシウム」或ハ苦土  
ト云フ又「マグネシウム」ノ燃ユルニ方テ白煙黒  
煙並ヒ發ス其黒煙ハ煤ニ非ス唯「マグネシウム」  
ノ未燃エサル者雲ノ如クナリテ飛散スルナリ



又其白キ者ハ「マグ子」レ「細キ塵」トナリテ揚ル  
ナリ

第四十七試 此白粉少許ヲ聚メ試管ニ入レ硫

酸數滴ヲ加ヘテ熱スレハ溶ケテ透明ノ液トナ

ル乃之ヲ陶皿テ移シテ煮詰メ大抵其水分盡ク

ルニ至ニ之ヲ冷セバ皿中ニ長キ針ノ如キ結晶

ヲ生ス是乃「マグ子」レ「硫酸」トク化合物ニシ

テ「瀉利塩」或ハ「硫酸」<sup>リ</sup>「マグ子」レ「ユム」ト號クル者ナ

其他「マグ子」レ「ユム」ノ化合物甚多ク其岩及礦石

中ニ存スル者亦之アリ但此鑛ノ天然特現スル

モノナレ「マグ子」レ「ヤ」ヨリ此鑛ヲ製スル方ハ甚

難クレテ費用多シ然レ氏近世ハ號<sup>ツ</sup>火花火等ニ

之ヲ燃シテ極メテ強キ光ヲ發スル用ニ供フ此

物乾キタル大氣中ニ在テハ永ク其光澤ヲ失フ

コトナレ故ニ若其製方容易ナレハ尚種々ノ用

ニ供フルコトヲ得ヘキナリ

第二十章 鑛屬

第五十七回 食塩ノ元素

「ソヂユム」ハ前テ水素ヲ取ルニ用井ル所ノ鑛ニ

レテ人ノ日常用ナル所ノ鑛屬トハ其性大ニ異  
ナリ乃其速ニ酸化レテ白キ粉トナルヲ以テ大  
氣中ニ貯フ可ラサルノミナラス又其直ニ水中  
ノ水素ヲ分離シ其酸素ト化合スルヲ以テ亦水  
ト觸レシムルコトヲ得ヌ故ニ此鑛ハ酸素ヲ含  
マサル所ノ液乃石腦油ノ如キ物ノ中ニ入レ貯  
ヘサルコトヲ得ヌ前ニ試ミタル如ク此鑛ノ小  
片ヲ水面ニ投スレハ浮ミ走テ水素氣ヲ發ス且  
初リトマ迅ヲ以テ其水ヲ赤色ニ染ムレバソチ  
ユニ消失レテ後其水變テ青色トナル是アルカ

此ノソウタヲ生スルハ九龍河ノ水ニ入ル  
第四十八試 中外英ニハ化學家最之ヲ貴重ス  
ルモ其類リ何トナレバ前ノマクチレユムアル  
ニニユムヲ其他化合物中ヨリ分チ出スニ此物ヲ  
用井レハナリ○ソチユムノ化合物ヲナサバル  
者ハ自然ニ生セサルコト固ヨリ論ヲ待タヌ故  
ニ「（註）」乃酸化シテユムノ酸素ヲ除キ去テ之  
ヲ製スルナリ余此鑛ノ小片ヲ匙ニ載セ燈火ヲ  
以テ熱スレハ先熔ケ次ニ火ヲ發シテ強キ黃色  
ノ炎ヲ揚ケ燃テ且白キ煙ヲ發ス且其煙ニ赤



硫酸 ソヂユム 酸

ト 塩化水素

此試験中揚發スル所ノ煙ハ容易ク其強キ酸性  
アルヲ見ルコトヲ得ヘシ乃リトマスニテ、染メ  
タル青色試験紙コ其煙ニ觸ルレハ忽赤色ニ變  
ルナリ

第五十八回 ポタシスノ元素

ポタシス此鑛ハアルカリノポタシス及其  
鹽類中ニ在ルモノナリポタシスヲ米粒許ノ  
大ニ切テ水面ニ投スレハ水中ノ酸素ト化合シ  
テポタシストナリ其作用極メテ烈シクシテ水

素忽燃エ揚リポタシスモ亦蒸發シテ其炎ハ之  
カ為ニ紫色トナルポタシスハ鹽類ハ地球上  
諸所ニ産ス又植物ノ灰中ニアリ其ポタシスノ  
名ハポタシスニ字ヨリ出ツルモノニシテ乃  
壺灰ノ義ナリ是此物ハ元來水灰ヲ水ニ溶レ壺  
ニ入レテ煮詰メテ之ヲ製スルニ由ルナリ○ソ  
ウタ及ポタシスヲ稱シテアルカシト云フ○ポ  
タシスハ鹽類中要用ナル者甚多シ

通俗ノ名 化學ノ名 其内ニ含ル物

炭酸 ポタシス 炭酸 ポタシス 炭酸

硝石

硝酸

硝酸

塩素酸 ポッターズ 塩素 ボッターズ 硝酸 ポッターズ 塩素酸

第四十九試 石鹼ハ動物或ハ植物ノ油トアル  
カリトヲ合セ煮テ製スルモノナリ但其ソウダ  
ヲ以テ造ルモノハ硬石鹼ニシテポッターズヲ以  
テスルハ軟石鹼トナルナリ今試ニ少許ノ石鹼  
ヲ造ルハ極ノテ易シ乃薄キ陶皿ニ菓麻子油五  
錢ト熱湯少許ヲ注キ入セ又苛性ソウダ液ヲ加  
ヘテ之ヲ煮レハ油ハ全ク消エ失セ皆石鹼トナ  
リテ水中ニ溶ク尚之ヲ煮ルコト良久シクシテ

一撮ノ食塩ヲ投ケ入ルレハ亦水中ニ溶ケ遂ニ  
石鹼ヲ逐ヒ出シテ皆水面ニ浮マシム是ニ於テ  
之ヲ冷セハ其石鹼硬クシテ白キ塊トナリ以テ  
手ヲ洗フ用ニ供スルコトヲ得ヘシ但石鹼ヲ製  
造スルニハ大抵通常ノ油及脂肪ヲ用ヰル今菓  
麻子油ヲ以テスルハ唯試ニ易キニ取ルノミナ  
リトシテ之ヲ用ヰルコトヲ得ヘシ但石鹼ヲ製  
左ニ説ク所ノ諸鑛屬ハ其内自貴キト然ラサル  
トノ差別アルニ一概ニ之ヲ言ヘハ皆種々ノ用  
ニ供ヘ甚要用ナル者ナリ

第三十一章 鑛屬

第五十九回 銅及其化合物

銅ハ赤色ノ鑛ニシテ藥罐鍋釜等ノ器ヲ造ルニ用ル又之ヲ針金ニシタル者ハ柔ク且強クシテ甚便利ナルモノナリ純粹ノ銅ハ時トシテ天然ニ産スルコトアリ然レモ大抵皆朴鑛ヨリ之ヲ得ルナリ而シテ其朴鑛ニ種々アリ就中最要用ナルハ銅ト硫磺トノ化合物ニシテ第五試ニ於テ製スル者ニ同シ乃此ヨリ硫磺ヲ除キ去テ純精ノ銅ヲ得ルナリ

銅ハ之ヲ他鑛ニ混シテ種々ノ重寶ナル合鑛ヲ製スルニ用ル乃真鍮及青銅ノ如キ是ナリ銅ヲ空氣中ニテ熱スレハ其色先曇リ終ニ其面ニ黒キ酸化物ヲ生ス益熱シテ止マサレハ其銅皆大氣ノ酸素ト化合シテ黒色酸化銅トナル第五十試 銅ノ二三小片ヲ試管ニ入レテ硝酸數滴ヲ加フレハ濃赤色ノ煙ヲ發シ硝酸銅ノ青色溶液ヲ得ヘシ今別ノ試管ニ水ヲ充テ此液ヲ加フルコト僅ニ一滴カリト雖モ更ニ此ニアムモノニアラ加フレハ忽青色トナルナリ乃此法ニ

由テ容易ク銅ノ塩類ヲ鑒定スルコトヲ得ヘシ  
○ 鑒鑿乃硫酸銅ハ硫酸ト銅トノ化合物ナリ之  
ヲ水ニ溶シ前ニ説ケル如ク其一二滴ヲ以テア  
ムモニアノ試験方ヲ施セハ亦硝酸銅ノ如ク濃  
青色ヲ生スヘシ

第六十四 亞鉛及其用方

亞鉛モ亦重寶ナル白キ鑛ニシテ多ク鍍板ヲ色  
ムニ用井ル是鐵板ヲシテ濕氣中ニ在ルモ鏽ヲ  
生セサラシムルナリ○亞鉛朴鑛ノ主ナル者ハ  
亞鉛ト硫磺ノ化合物ニシテ之ヲ硫化亞鉛ト曰

フ○亞鉛モ亦重寶ナル合鑛ヲ製スルニ用井ル  
例ヘハ真鍮ハ此物ト銅トノ合鑛ナルカ如シ且  
此ニ由テ真鍮ノ單體即元素ニ非ルヲ知ルヘシ  
第五十一試 亞鉛ヲ稀硫酸ニ溶セハ水素氣ヲ  
發シ硫酸亞鉛ヲ生ス乃水素ヲ製スルノ後其瓶  
中ニ殘ル所ノ液少許ヲ濾シ之ヲ煮詰メテ冷セ  
ハ硫酸亞鉛ノ白キ結晶ヲ生ス○亞鉛ノ薄板ト  
シタル者ヲ取リ強ク大氣中ニ於テ熱スレハ燃  
テ白キ酸化亞鉛トナル此ニ由テ亞鉛ハマグ子  
シテハニ類似スルヲ知ルヘシ

第六十一回 錫及其製方

錫ハ光澤アル白キ鑛ニシテ亦多ク銕ヲ包ムニ  
用井ハ通常アルト唱フルモノハ實ハ銕板ニ  
シテ之ヲ熔ケタル錫ノ中ニ浸シタル者ナリ此  
ノ如クスレハ其銕ハ錫ニ包マレテ鑛ヲ生スル  
コトナキナリ錫ハ又種々ノ重寶ナル合鑛ヲ製  
スルニ用井ル乃鑛附テ用井ル所ノ白鑛ハ其一  
知リ○錫ノ鑛石中最要用ナルモノハ酸化錫ナ  
リ此物ニ木炭ヲ加ヘテ熱スレハ其酸素ヲ失ヒ  
溶ケテ純粹ノ錫トナリテ流レ出ツルナリ

第三十七圖



第五十二試 酸化錫ノ粉末少許ヲ取テ同量ノ  
炭酸ソダガユムヲ混シ次ニ木炭片ニ淺凹ヲ穿テ  
其混合物ヲ其内ニ入レ吹火管ヲ以テ燈炎ヲ吹キ  
之ヲ熱スルコト圖ノ如クスレハ其混合物直ニ熔  
ク尚之ヲ熱スルコト良久シ  
クシテ後冷シ塊トナルニ及  
テ小刀ヲ以テ之ヲ炭臺ヨリ  
割キ離レ乳鉢ニ入レテ細ニ  
碎キ水ヲ以テ其炭粉ヲ洗ヒ  
去レハ錫ノ純粹ナルモノ圓



キ光澤アル粒トナリテ鉢ノ底ニ殘ル是酸化錫  
ノ酸素ハ木炭ノ炭素ト化合シ炭酸トナリテ飛  
散シ錫ハ残り熔ケテ粒トナリタルナリ

第六十二回 鉛及其化合物

鉛ハ重キ鑛ニシテ稍青色ヲ帶フ火ニ逢テ熔ケ  
易ク又之ヲ切ルコト極メテ易ク大氣中ニ酸化  
シテ鏽ヲ生スルコトナシ故ニ用井テ石炭氣等  
ヲ導ク所ノ管ヲ造リ又打延シテ板トナシ以テ  
家屋ヲ掩フニ甚重寶ナリトス又之ヲ熔シテ炮  
彈ヲ鑄ルニ用井ル鉛、礦石ハ硫化鉛ナリ

鉛ノ化合物中種々ノ重寶ナル者アリ

通俗ノ名 化學ノ名 其含ム物

鉛粉 炭酸鉛 鉛ト炭酸

鉛丹 赤色酸化鉛 鉛ト酸素

金密陀 黄色酸化鉛 鉛ト酸素

鉛糖 酢酸鉛 鉛ト酢酸

クロウム黄 クロウム酸鉛 鉛ト「クロウム」酸

鉛粉、鉛丹及「クロウム」黄ハ之ヲ顏料ニ用井ル○

黒鉛トハ石墨ノ俗名ナリ此物純粹ノ炭素ニシ

テ固ヨリ鉛ヲ含ムコトナシ學者亦知ラスハ有

第五十三試 水ヲ玻璃盃ニ盛リ醋酸鉛ノ溶液  
ヲ加ヘ更ニ「クロウム酸」ボツタシエムノ溶液ヲ注  
キシルレハ鮮美ナル黄色ノ「クロウム酸鉛」ノ沈  
澱ス其分合ノ状左ノ如シ

混合前

「クロウム酸」ボツタシエムノ「酢酸鉛」二物共

混合後

「クロウム酸鉛」水ニ溶ケサル  
黄色ノ粉「酢酸」ボツタシエムノ  
第六十三回 水銀ノ用法

水銀 單純ノ鑛屬中ニテ通常熱度ニ因テ液體  
ヲナス者ハ獨此水銀ノミナリ故ニ甚重寶ニシ  
テ殊ニ寒暖計測熱度器氣壓表大瀾ル器重玻璃鏡  
ヲ製スルニ緊要ナリ此物只大氣ニ曝スノミニ  
テハ光澤ヲ失ハサレトモ久シク之ヲ熱スレハ  
酸素ト化合シテ赤色ノ酸化水銀ト成ル然レモ  
更ニ強ク熱スレハ再其酸素ヲ失フ水銀ハ之ヲ  
熱シ沸騰シテ水ノ如ク蒸餾セシムルコトヲ得  
ヘシ其他化合物ハ大抵皆他ノ鑛類ノ如ク毒アリ  
然レモ中ニ就テ藥料ニ供フル者モ亦之アリ

第六十四回 銀ノ性質

銀ハ甚要用ナル鑛ニシテ人ノ貴重スル所ナリ  
此物諸地ニ産ス最多キハ「メキシコ」「ペリコ」ノ地  
ナリ此鑛ノ最重寶ナル所以ハ次シテ酸化シテ  
銹ヲ生スルコトナキニ由ルナリ但硫磺ニ觸ル  
レハ黒色トナル是黒キ硫化銀ヲ生スレハナリ  
銀ハ極メテ古代ヨリ高價ノ物品美麗ナル器物  
ヲ造ルニ用井殊ニ之ヲ用井テ銀幣ヲ造リ諸方  
ニ通用ス但諸國ノ銀幣ハ大抵少許ノ銅ヲ雜ヘ  
是銀ノ堅クスル為ナリ

第五十四試 銀幣中ニ銀ト銅トヲ含ムコトヲ

試驗セント欲セハ摩滅シテ通用ニ供フ可ラサ  
ル所ノ五錢銀ヲ取り之ヲ切テ試管ニ入レ硝酸  
少許ヲ注キ加ヘ微熱スレハ濃キ赤色煙ヲ發シ  
銀幣忽溶ク又既ニ試ミタル如ク銀ハ食塩ノ有  
無ヲ鑿定スルニ用井ル故ニ今此方ヲ轉用シ食  
塩ヲ以テ銀ヲ檢出スヘシ乃銀幣ヲ硝酸ニ溶ス  
所ノ液ニ食塩溶液ヲ注加スレハ忽濃キ白色沈  
澱ヲ生ス是塩化銀ヲ生シ其性ハ水ニ溶ケサル  
モノナルヲ以テ液中ニ沈澱スルナリ其狀左ノ

如シ

初用井ルモノ

硝酸銀

塩化

ソヂユム

兩十カラ水ニ溶ケ易シ

後ニ得ルモノ

塩化銀

水ニ溶ケサ  
ル白色粉

硝酸

ソヂユム

水ニ溶ケ易シ

次ニ紙ヲ以テ之ヲ濾セハ透明ナル青綠色ノ液

ヲ得乃銀幣中ノ銅ハ皆其内ニ溶ケ在ルナリ故

ニ磨キタル錢片ヲ其内ニ浸セハ銅分直ニ附着

シテ其赤色トナルヲ見ルヘシ

第六十五回 黄金ノ用方

黄金ハ銀ヨリモ最貴重ナル鑛ニシテ其色ハ黄

ナリ其地中ニ産スル者常ニ純粹ヲナス近年カ

リタルニ中及「オースタラリヤヨリ多ク之ヲ出

ス黄金ハ諸鑛中其重サ最大ナル者ノ一ナリ此

物引キ延シテ細キ針金トナシ又薄ク打チ延シ

テ金箔トナシ以テ諸般ノ器物ヲ滅金スルニ用

井ル純粹ノ金ハ甚シク柔ニシテ幣トナスニ堪

ハス故ニ金幣ヲ造ルニハ必少許ノ銅ヲ加フ是

大ニ金ヲ堅クスル益アレハナリ

第五十五試 黄金ハ如何ナル強酸ニテモ唯一

味ニテハ之ヲ溶スコト能ハス試ニ金箔一枚ヲ  
取テ之ヲ二分シ各別ニ試管ニ入レ其一ニハ硝  
酸ヲ加ヘ一ニハ塩化水素酸ヲ加フルモ二管共  
ニ金ノ溶クルヲ見ス然ルニ今ニ管ノ液ヲ混同  
スレハ其金忽消失ス是ニ由テ二酸各自其金ヲ  
溶スカナレト雖モ之ヲ混合スレハ能ク之ヲ溶  
スヲ知ルヘシ黄金ハ火ニテ大氣中ニ於テ曇リ  
ヲ生スルコトナク又銀ノ如ク硫磺ニ觸レテ其  
色ヲ變スルコトナレ故ニ上古ヨリ貨幣及諸般  
ノ飾物ニ之ヲ用井テ最モ貴シトス

第十二章 結尾

第六十六回 諸物定リタル分量ヲ以テ化合  
前章已ニ火土水氣ノ四物ヲ説キ其性質及變化  
ヲ明ニセリ今爰ニ更ニ其諸件中最要ナル者ヲ  
詳論ス○學者既ニ前條ニ論スル所ニ由テ吾地  
球ノ成ス所ノ諸物ノ體質ヲ明ニシ且天地間萬  
類其動物植物若シクハ礦物ニ屬スルヲ論セス  
皆六十三元素ノ單體或ハ數質相合シテ成ルコ  
トヲ知ルコトヲ得タリ謂フ所ノ元素トハ化學

家曾テ其一ヲ變シテ他ノ一元素トナスコト能  
ハス又之ヲ分ケテ二ノ異ナル物トナスコト能  
ハサル者ヲ謂フナリ  
學者又已ニ此諸元素相化合スレハ其形狀性質  
全ク其初ト異ナル所ノ一新物ヲ生スト雖モ復  
方ヲ以テ其中ヨリ初ノ元素ヲ取出スベキヲ學  
ブコトヲ得タリ加之化合物ノ重ハ常ニ其元素  
ノ重ヲ相加フル所ノ數ニ同シク其分合變化ノ  
間毫モ其重ヲ減セサルコトヲ知ルコトヲ得タ  
リ是ニ由テ物質ハ人力ノ能ク造出シ能ク消滅

スヘキニ非ルコトヲ知ルヘキナリ  
秤ヲ以テ物ノ重ヲ量リ以テ化合物ノ成立ヲ定  
ムル法方モ亦已ニ前ニ之ヲ説キ示セリ○凡化  
學家ノ要務トスル所ハ其試験セント欲スル所  
ノ物ヲ以テ秤ニ上セ其化合物中含ム所ノ各元  
素ノ重ヲ定ムルニ在リ乃第二十試ニ於テ水ノ  
成分ヲ測定スルカ如キ是ナリ  
其試験ニ因テ得ル所ノ重量左ノ如シ

且弱酸素ノ重  
水素ノ重  
二成分

二元素化合シテ得ル所ノ重 十八分  
且既ニ云ヘル如ク水中ノ二元素ハ所在皆常ニ  
此比例ヲナサズト云コトナリ獨水ノミナラス  
其他ノ諸化合物モ亦皆其含ム所ノ元素必定マ  
リタル比例ヲ以テ化合セザルハナシ例ハ第  
三十試ニ於テ用井ル所ノ赤色酸化水銀ノ如キ  
モ化學家詳細ニ其成分ヲ測リ左ノ比例ヲ以テ  
相化合スルコトヲ知ルナリ  
酸化水銀二百十六分中含ム所ノ元素  
酸素 十六分

水銀

二百分

故ニ若ク酸素十六斤ヲ製セント欲セハ縱少キモ  
酸化水銀二百十六斤ヲ用井サルモ下ヲ得且  
試験中誤テ散失スルコトナクハ其酸素ヲ得  
ルコト恰モ意ノ如クナルヘシ故ニ定量ノ酸素  
ヲ製セント欲セハ簡易ノ算方ニ由テ用井ル所  
ヲ酸化水銀ノ量ヲ知ルニキナリ二十四分  
此ノ如ク物ノ化合スルニ各一定ノ量アルコト  
ハ化學上ニ於テ極メテ要用ナルコトニシテ前  
ニ説ク所ノ諸物皆然ラサルハナシ乃其分量ニ

適スル所ノ硝石硫酸トヲ取リ此ニ因テ硝酸ヲ製シ悉之ヲ捕聚セント欲セハ必硫酸九十八分硝石百一分トヲ用井ルヘシ乃六十三分ノ硝酸ノ得ルナリ又「マグ子シユ」ノ線二十四分ヲ燃シ少シモ之ヲ失フコトナケレハ恰モ四十分ノ「マグ子」レヤヲ得ルナリ

此ニ由テ見レハ諸元素互ニ化合スルニ必定リタル重ヲ以テスルコト知ルハシ其重ノ比例ヲ示ス所ノ數ヲ名ツケテ化合物ト云フ

第六十七回 元素化合物

今元素中最要ナル者ノ符號及化合物ヲ擧クルコト左表ノ如シ

元素化合物略表

類	元素	符號	定量	類	元素	符號	定量
酸素	O		十六	鐵	Fe		五十六
水素	H		一	アルミニウム	Al		二十七
窒素	N		十四	カルシウム	Ca		四十
炭素	C		十二	マグネシウム	Mg		二十四
				ソダウム	Na		二十三
				ポタシユ	K		三十九
				銅	Cu		六十三
				亜鉛	Zn		六十五

小學化學書 卷三 二十三



塩素	Cl		三十五	錫	Sn		百十八
硫素	S		三十二	鉛	Pb		二百七
珪素	Si		二十八	水銀	Hg		二百
				銀	Ag		百零八
				黄金	As		百七十七

上表中ノ符號ハ洋名元素ノ首字ニシテ其名ヲ書スルノ簡便ナルヲ欲シテ設クル者ナリ例ヘハ「カ」ル「エ」ム「凶」ノ如キ其全名ヲ書セスシテ唯「Co」ノ字ヲ用井ルカ如シ又表中ノ數字ハ元素互ニ相化合スルノ分量ヲ示ス所ノ比例ニシテ此數

ハ皆諸元素ノ化合物ヲ試験シ之ヲ分析シテ知ル者ナリ乃酸化水銀ヲ分析シテ其二百十六分中ニハ酸素十六分ト水銀二百分トアリ又第六試ノ如ク硫磺ト銅トヲ并セ熱スルモノハ銅六十三分ト硫磺三十二分ト化合シテ硫化銅九十五分ト生ズ縦試ニ其内ノ一元素ヲシテ其比例ヨリモ多ク分量ヲ増スモ其餘ノ化合セスシテ必離レ殘ルナリ又酸素ハ常ニ一定ノ分量即十六分ヲ以テ諸礦屬ト化合シ酸化物ヲナシ且之ト化合スル所ノ礦屬ノ重量亦各常ニ其固有

化合量ニ同シク縱然ラサルモノアルモ必其  
倍數ヲ以テス乃酸素ノ重十六分ハ鐵五十六分  
ト化合シテ酸化鐵トナリ又カルシエム四十分  
ト化合スレハ酸化カルシエム乃尋常ノ石灰ト  
ナリ其他亞鉛六十五分錫百十八分鉛二百七分  
ト化合シテ各其酸化物ヲナスカ如キ是ナリ  
符號ヲ以テ元素ヲ示スハ更ニ深意アルコトニ  
シテ徒ニ其簡便ナルニ取ルノミニ非ス例ヘハ  
O 或ハ H<sub>2</sub>ノ符號ハ徒ニ汎ク定ナキ酸素或ハ水  
銀ヲ稱アルニ非スレテ直ニ此二元素化合量ノ

重ヲ知ラレムルナリ乃 O トハ酸素ノ重十六分  
ヲ示シ H<sub>2</sub> ハ水銀ノ重二分ヲ示スモノニレテ  
次シテ他重ヲ指スニ非ス故ニ表中常ニ O<sub>11</sub> 十  
六 H<sub>2</sub> 11 二百ト記セリ是レハ算數上ノ書式ニ  
シテ同シト云フ義ナリ  
是故ニ更ニ化合物ノ符合ヲ書セント欲セハ唯  
其諸元素ノ符號ヲ並ヘ書シテ是ナリトス乃 H<sub>2</sub>O  
トハ酸化水銀ニシテ且此符號ニ由テ其他化合  
物中ニハ酸素ト水銀トノ二元素アルコトヲ知ル  
ノミナラス各其定ノ分量ヨリ成ルコトヲ知ル

化學史 卷三 二十五

コトヲ得ルナリ何トナレハ前ニ言ヘル如ク  
ハ酸素十六分照ハ水銀二百分ナルコトヲ知ル  
カ故ナリ是ニ由テ見レハ化合物ノ符號即式ハ  
當ニ其由テ成ル所ノ物ヲ示スノミナラス又其  
分量ヲ書記スルニ最要用ナルモノナリ例ハ  
CaOトハ酸化カルシウム乃石灰ニシテ且其重ハ  
カルシウム四十二酸素十六ヲ加フル所ノ和數  
乃五十六分ヲ示スコトヲ知リZnOハ酸化亞鉛ニ  
シテ其重ハ亞鉛六十五酸素十六ノ和數乃八  
十一分ナルヲ知ルコトヲ得ルナリ又H<sub>2</sub>Oハ水ナ

リ此Hノ側ニ又ノ數字アルハ水素ノ化合量ニ  
倍ヲ示スモノニシテ其重ハ二分ナリ更ニOノ  
十六ヲ加フレハ十八トナル因テ此式ハ水ノ十  
八分ヲ示スコトヲ知ルナリ

第六十八回 定量倍數ヲ以テ化合スルコト

凡諸化合物其性質互ニ異ナリト雖氏未必シモ  
異類ノ元素ヨリ成ルトスヘカラス是縱同元素  
ヨリ成ルモ化合分量ノ同シカラサルニ由テ其  
性形大ニ異ナルヲナスコトアリ其例ハ酸素ト  
酸素ト化合シテ五種ノ異性化合物ヲナスコト

左ノ如シ合々ニ異ナリ  
第一ハ一酸化窒素ト名ツケテ窒素ハ重二十八  
分ト酸素ハ重十六分ヨリ成ルモノナリ  
第二ハ二酸化窒素ニシテ窒素ノ重二十八分ト  
酸素ハ重十六分ノ倍數乃三十二分ヨリナルナ  
第三ハ三酸化窒素ト曰テ其重ハ窒素二十八分  
ト酸素化合量ノ三倍乃四十八分ヨリ成ルナリ  
第四ハ四酸化窒素ト稱ヘテ乃其重ハ窒素二十  
八分ト酸素化合量ノ四倍乃八十四分ヨリ成ル

ナリ

第五乃最後ノ化合物ハ五酸化窒素ト稱ヘテ窒  
素二十八分ト酸素化合量ノ五倍乃八十分ヨリ  
成ルナリ  
是上表ニ示ス所ノNハ窒素ノ十四分ニシテO  
ハ酸素ノ十六分ナルコトヲ暗記スレハ前ニ化  
合物ノ式ヲ書キ記スコト容易ナリ乃第一ノ化  
合物ハ窒素ノ二十八分即其化合量ノ二倍ト酸  
素ノ一化合量トヨリ成ル故ニ其式ハ  $\text{N}_2\text{O}$  ナリ此  
ノ如ク記號ノ上側ニ數字ヲ書スルハ其化合量

倍數ヲ示ス者ナリ故ニ若<sub>レ</sub>〇ト記スルトキハ  
 酸素化合物ノ三倍即四十八分ナルコト推シテ  
 知ルヘシニ若<sub>レ</sub>二ト記スルトキハ酸素化合物ノ  
 此ト同理ニテ其餘ノ四化合物ノ式ヲ示スコト  
 次ノ如シ  
 第二ノ化合物  $N^{\circ}O$   
 第三ノ化合物  $N^{\circ}O$   
 第四ノ化合物  $N^{\circ}O$   
 第五ノ化合物  $N^{\circ}O$

此ニ由テ見レハ第二ノ化合物中ニ含ム所ノ酸  
 素ノ分量ハ第一含ム所ニ二倍シ第三ヨリ以下  
 三倍四倍乃至五倍ニシテ決シテ其分量ノ差ヲ  
 コトナシ縦其中間ノ分量ヲ以テ化合セシメシ  
 コトヲ欲シ試ニ窒素ノ重二十八分ト酸素ノ重  
 二十分トヲ混スレバ唯其窒素全量ト酸素十六  
 分ト化合スルノニニシテ其餘ノ酸素四分ハ必  
 殘離スルナリ此理ニ由テ左ノ化合ニ大則ヲ了  
 知スヘシ

第一則諸元素其他含量ト名ツクル所ノ定リタ

第二則同レクニ元素ニシテ數種ノ化合物ヲナ  
第六十九回 化合式ノ理解  
是ニ由テ見レハ前ノ諸章ニ論スル所ノ今合變  
化ハ學者ノ既ニ見シルコトヲ得タルモノト未  
曾テ見サレ者トニ論ナク皆記號ヲ以テ之ヲ書  
記スルコトヲ得ルナリ是此諸般ノ變化ハ皆自  
一定ノ規則アル者ニシテ式ヲ記シテ以テ之ヲ

求ムレハ音ニ其變化中起ル所ノ事故ヲ知ルハ  
キノミナラス又異性ノ新物各幾何ヲ化生スル  
ヲ知ルコトヲ得ヘシ今一二ノ例ヲ擧ゲテ之ヲ  
明ニセン乃第三十八試ニ於ルカ如ク硝酸ヲ製  
スルニハ硝酸<sup>ボツタ</sup>シユ<sup>ハ</sup>即硝石ト硫酸<sup>ハ</sup>テ用  
井凡然ルトキハ硝酸ハ蒸發シテ受器ニ入り其  
レト<sup>ル</sup>止内ニハ硫酸<sup>ボツタ</sup>シユ<sup>ハ</sup>ヲ殘スナリ今  
此變化中如何ナルコトノ生スルヲ明ニシ且硝  
石ト硫酸トノ量ヲシテ各過不及ナカラシメ  
トスルニ二物各何程ヲ用井テ可ナリヤヲ知ラ

小學化學書 卷三 二十九

ント欲セハ宜シク先硝石ト硫酸ノ式ヲ書記セ  
 スハ有ル可ラス乃硝石ハ三元素ヨリ成ルモノ  
 ニシテ其式ハ $\text{KNO}_3$ ナリ詳ニ之ヲ説ケハ $\text{K}$ ハ $\text{H}$   
 タレユムニシテ其化合量三十九分ナリ又 $\text{N}$ ハ  
 窒素十四分ニシテ $\text{O}$ ハ酸素十六分ノ三倍乃四  
 十八分ナリ又硫酸ノ式ハ $\text{H}_2\text{SO}_4$ ニシテ其各元素  
 ノ分量ハ水素 $\text{H}$ 二分ノ倍量乃二分ト硫磺 $\text{S}$ 三  
 十二分酸素 $\text{O}$ 十六分ノ四倍乃六十四分ヨリ成  
 ルナリ今此二物ヲ混合スルハ忽一變化ヲ起シ  
 硫酸中ノ水素半量ト硝石中ノ $\text{H}$ トシユム全量

ト交代シテニノ新物ヲ生ス乃一ハ $\text{HNO}_3$ 硝酸ニ  
 シテ此物黄色ノ液トナリテ蒸餾シ又一ハ $\text{KNO}_3$   
 硫酸 $\text{H}_2\text{SO}_4$ シユムニシテ此物白キ塊トナリレト  
 ルト内ニ殘ルナリ故ニ此變化ヲ示スニ左ノ式  
 ヲ以テスヘシ

變化ノ前

變化ノ後

硝石ト

硫酸

成ル

硝酸ト硫酸 $\text{H}_2\text{SO}_4$



+



==



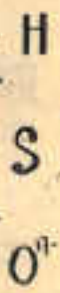
是ニ由テ明ニ其變化ノ理ヲ悟ルヘク且其間一  
 物ヲモ滅スルコトナク後ニ得ル所ノ二物ノ重

ト初用井ル所ノ二物ノ重ト恰モ相同シキノリ  
 更ニ之ヲ明白ニセント欲セハ諸元素化合量ヲ  
 示ス所ノ數字ヲ書スルコト左ノ如クスヘシ

變化ノ前



三十九 十四 十四 十八



二十 三十二 十六

百。一

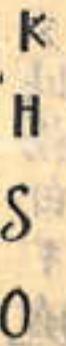
九十 十八

|| 總計百九十九

變化ノ後



一十 十四 十四 十八



三十九 十一 三十二 十六

六十三

十

百三十六

|| 總計百九十九

此式ニ由テ見レハ硝石ノ重百一合ト硫酸ノ重  
 九十八分トヲ用井ルトキハ二物共ニ少シモ費  
 耗スルコトナク硝酸六十三分ヲ得ルナリ既ニ  
 此式ヲ會得スレハ更ニ幾量ノ硝酸ヲ製セント  
 欲スルトキ其此ニ用井ルヘキ物ノ重量知ルコ  
 ト極メテ易シ例ヘハ硝酸十斤ヲ製スルニハ硫  
 酸硝石各幾何量ヲ用井テ可ナリヤヲ知ラント  
 欲スルカ如キ乃前ニ云フ所ニ由テ考ヘルニ硝  
 酸六十三斤ヲ製スルニハ硫酸九十八斤硝石百  
 〇一斤ヲ用井ルヘシ故ニ今硝酸十斤ヲ得ルニ



ハ硫酸九十八斤ノ六十三分ノ十ト硝石百一斤ノ六十三分ノ十トヲ用井ルヘキコト明ナリ是皆化合物ニ比例シテ容易ニ算計スルコトヲ得ヘキナリ

又更ニ一例ヲ舉ク前ノ第十五試ニ於ルカ如ク硫酸ト亞鉛トヲ以テ水素ヲ製スル時ニ方テ其間ニ起ル所ノ變化ヲ示スニ式ヲ以テスルコト左ノ如シ



變化ノ前

六十五、十      二、三十二、六十四  
 六十五分ノ亞鉛      九十八分ノ硫酸

變化ノ後

二、十      六十五、三十二、六十四  
 二分ノ水素      百六十一分ノ硫酸亞鉛

此式ハ亞鉛六十五斤ト硫酸九十八斤ヲ用井レハ必水素氣二斤ト硫酸亞鉛百六十一斤トヲ得ル意ナリ今試ニ生徒ニ問フ水素四十斤ヲ製スルニハ亞鉛硫酸各幾何ヲ用井テ可ナリヤ亦知

小學化學書 卷三 三十二 文部省

リ難カラサルナリ

諸他ノ離合變化モ亦此ト同方ニ由テ一回其理ヲ了解スレハ式ヲ以テ之ヲ書記シ以テ其變化ノ狀勢及初用ナルヘキ諸物ノ分量ト後ニ得ル所ノ新物ノ分量ト皆一目瞭然ナラシムルコトヲ得ルナリ

夫化學家ノ要務トスル所ハ地上萬物ノ性能ヲ究メ新物ヲ檢出シテ其體質ヲ明ニシ其用ヲ得セシムルニアリ化學家常ニ試驗ニ從事シ勉勵刻苦シテ止マサルモノハ一タヒ化合物ノ成否

ヲ定メ其集成分解ノ理ヲ明ニスレハ其永久變易スルコトナキヲ知ルニ由ル何トナレハ凡諸物ノ分合ハ自然ニ一定不變ノ法則アリテ常ニ之ニ遵ヒ由ラスト云コトナケレハナリ

保田東潛 校

小學化學書卷三畢 大尾

小學山學書卷三

諸他ノ雜合

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

ノ

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

吉

附録

器械ノ用方並ニ試験者ノ心得

凡試験ハ豫丁寧ニ之ヲ為シ然ル後生徒ニ指示スヘシ且堅ク本文ニ説示スル所ノ試方ヲ奉守セスハ有ル可ラス

凡試験ヲナスニ器物ノ清潔ナルト手技ノ簡易ナルヲ要スルコト猶事理ヲ教解スルニ方テ其論説ハ簡明ナルヲ要スルカ如シ

當日ノ試験ニ用井ルヘキ品物ハ皆順ヲ逐テ机上ニ列置シ時ニ臨テ混雜ノ患アルコトナカラ

シムヘシの「ガ」デ「ハ」英國高名人化學家ニシテ殊ニ試験講義ニ於テ最其妙ヲ得タリ此人講議中施用スヘキ諸試験ヲ準備スルニ常ニ數時ヲ費シ細事ト雖モ試験ノ成否ニ關係スルモノハ必之ヲ忽ニスルコトナク瓶ノ栓子ニ至ル迄豫一々之ヲ按テ點檢シ試験ニ臨テ固着混亂ノ患ヲ生スルコト勿ラシム豈尊ハサル可ンヤ講議終ルトキハ丁寧ニ諸器械ヲ淨拭シ其器械及藥品等モ皆其故位ニ復スヘシ諸酸類ノ如キ就中硫酸及硝酸ハ烈シキ腐蝕性アリ又燐ハ甚

燃テ易キヲ以テ最危シトス其他ノ諸藥品モ亦大抵毒性アリ故ニ皆之ヲ教師ノ私室ニ藏メ次レテ生徒ヲレテ猥ニ之ヲ操用スルコト勿ラシム一シ生徒年已ニ長シ且學術稍進ムモノハ試験ヲ傍觀スルコト一遍シテ後教師之ヲ監督レテ親シク躬試驗ヲナサシムレハ大ニ益アリ

本文ニ擧クル所ノ試験ノ心得

第一試 瓶口若大ナルニ過クレハ厚紙ヲ以テ之ヲ掩フヘシ然ラサレハ新氣侵入シ陳氣ト交

代シ永ク蠟燭ヲシテ燃エシムレハナリ○石灰  
水ヲ製スル方ハ生石灰一片ヲ瓶ニ入レ水ヲ加  
ヘテ能ク振り拭カシ然ル後之ヲ靜定シテ其上  
清ヲ取ルナリ

第三試 更ニ良キ方ハ苛性ソウダヲU字形ノ  
管ニ入レ細キ彎管ヲ以テ蠟燭ヲ入ル、所ノ管  
ト繫キ其重ヲ合セ秤ルナリ然ラスレテ圖ニ示  
ス所ノ方ニテハ其管細キニ過クレハ苛性ソウ  
ダ熔ケテ流レ下ルノ患アルナリ

第五試 此試驗ハ亦試管ヲ以テナスコトヲ得

ヘシ硫黃ノ沸騰スル前ニ能ク注意シテ銅コ熱  
スヘシ否サレハ銅ノ火ヲ發スルコト鮮明ナラ  
ス

第六試 鱗ヲ切ルニハ最慎ヲ加ヘ常ニ水中ニ  
於テ之ヲ為スヘシ然ル後意ヲ用井テ紙間ニ挾  
ミ輕ク推テ乾シ濕リナキ箸ヲ以テ之ヲ挾ミ水  
面ノ皿ニ上スヘシ

第十試 此試驗ハ冬日ハ行ヒ難シ何トナレハ  
光線強カラサル故ナリ○氣泡多ク聚レハ之ヲ  
細キ試管ニ移シ木燭ヲ挿入シテ其酸素ナルヲ

證スルコトヲ得ヘシハ井水ニ炭酸ヲ溶シ含ム  
コトハ石灰水ヲ加フレハ白キ濁ヲ生スルニテ  
知ルヘシ

第十二試 クロウヅノ電池ヲ準備スル方 水三  
合ヲ取り鉢ニ入レ徐ニ強硫酸二十五錢ヲ注キ  
加ヘ能ク相混和シテ後放冷スヘシ電池ヲ繋  
為ニ用井ル所ノ金挾等ハ砂紙ヲ以テ磨キ滑澤  
ナラシムヘシ次ニ其電池ヲ組立ツルニハ素焼  
ハ筒ヲ大ナル壺ノ内ニ入レ又白金箔ヲ其筒内  
ニ入レ金挾ヲ以テ互ニ相繋クヘシ且壺ニハ前

ニ製成シタル稀硫酸ヲ充テ筒ニハ漏斗ヲ以テ強  
キ硝酸ヲ注入シ殆満ツニ至レハ電池ノ装置已  
ニ具リタルナリ既ニシテ試験終レハ別ニ二箇  
ノ瓶ヲ設ケ一ハ硫酸ヲ集メ入レ一ハ硝酸ヲ入  
レ後日試験ノ用ニ供フヘシ但電池ヲ用イルコ  
ト甚久シカレハ兩酸共ニ皆復用イル可ラサル  
ニ至ル故ニ之ヲ棄テ、可ナリ亞鉛及素焼ノ筒  
ハ水中ニ浸シ置キ一夜ヲ經テ後ニ取藏スベシ  
若初硫酸ヲ注キ入レ未電池兩端ノ銅線ヲ繋カ  
サルニ亞鉛ヨリ氣泡ヲ發スルコトアルハ已ニ

小學化學書 卷三 三十七 文部

亞鉛板をアマルカムノ盡キタル微ニシテ更ニ  
新ニ之ヲ製セサルコトヲ得ズ其方ハ先塩化水  
素ヲ以テ其亞鉛ノ面ヲ洗ヒ後ニ水銀少許ト其  
酸ト共ニ亞鉛ノ面ニ注クヘシ此ノ如ク數回反  
覆スルニ亞鉛ノ面ニ光澤ヲ生スルニ至レハ之ヲ  
電池ニ没スルモ其兩端ノ線ヲ繋クニ非レハ硫  
酸ニ溶クテ氣泡ヲ發スルコトナキナリ  
第十三試 ハボトエムヲ貯フルニ常ニ石腦油  
中ニ入レ置テ次ニテ大氣或ハ濕氣ニ觸レシム  
可ラス○此物ハ容易ク小刀ヲ以テ切ルコトヲ

得ヘシ

第十六試 ソヂエム水銀ト相合スルトキハ輕  
キ爆鳴ヲ發ス然レモ次ニテ危害ヲナスニ非ス  
且其之ヲ合スル量ハソヂエムノ小片ト其積五  
倍許ノ水銀ヲ用イルベシ  
第十七試 豫硫酸ト水トヲ混合スヘシ其方ハ  
酸一容ヲ取り徐ニ水六容中ニ加ヘテ能ク攪和  
スルナリ

第二十試 ㊦管ニ代フルニ溶ケ難キ玻璃管ノ  
球ヲ具ヘサルモノヲ以テスルモ可ナリ乃其一

端ハ木栓ヲ以テ(ウ)管ニ繋ギ一端ハ之ヲ引テ細ク延バレ曲ケテ圖ニ示ス如クスベシ酸化銅五錢許ヲ用井ルニ非レハ水ヲ生スルコト多カラスシテ其重ヲ秤ルコト難シ試驗終リテ後再其銅粉ヲ酸化スヘシ其方ハ火酒燈ヲ管下ニ置テ之ヲ熱シ第三試ニ用井ル所ノ水樽ヲ以テ大氣ヲ管中ニ通スヘシ此ノ如クスルハ其酸化銅ノ重初ニ復シテ再此試驗ヲナストキノ用ニ供フルヲ得ヘシ

第三十一試 此試驗ヲナスニハ良好磁鐵ト鐵

粉ノ細末ナルモノ及精良ナル秤ヲ用井ルニ非レハ不可ナリ又更ニ物ノ酸化シテ其重量ノ增加スルヲ示ス一方ハ上ニ説ケル如ク酸素ヲ失フ所ノ銅粉ヲ熱シ大氣ヲ通スルナリ

第三十六試 此試驗ハ稍熟煉スルモノニ非レハ常ニ氣類ヲ管端ニ於テ燃シ其ヲシテ減エシメサルコト難シ

第四十試 密閉スル所ノ室内ニ於テ塩素氣ヲ生發スルコト勿レ

第五十二試 次管ヲ用井ルニハ大氣ヲ吹出ス



ニ宜シク頬ヲ以テスヘシ肺ヲ以テス可ラス此  
ノ如クスレハ大氣ヲ呼吸スルニ鼻ヲ用非常ニ  
頬ヲ膨脹シ間斷ナク其氣ヲ吹キ出スコトヲ得  
ルナリ

附録終

試驗ニ用井ル所ノ器械目錄

試驗番號

第一、蠟燭及針金ノ柄

代價  
五錢

第三、玻管蠟燭苛性ソーダヲ入

ル、ニ用井ル所ノ形玻

管及水樽ヲ繫クニ用井ル

所ノ「ゴム管

七十五錢

○天秤及玻璃ノ皿及ニ「オン

区以下ノ分銅一揃

橙箱入

二元

第五、二オン以入玻璃瓶及鐵ノ三

足臺

七十五錢

○火酒燈 火酒三合添

一元

第六、玻璃罩及燐ヲ入ル、ニ用

牛ル所ノ皿

第十二、電氣ヲ以テ水ヲ分解スル

ニ用牛ル所ノ器械ニ氣ヲ

集ムル管及之ヲ懸クルニ

用牛ル所ノ針金添

三元

○グロウブ電池 四壺并ニ木

臺及針金一箇

十元

第十四、玻璃ヲ乳鉢乳棒及氣ヲ聚

ムル筒

一元

第十五、水素ヲ發スル為ノ玻璃等

石燒ノ聚氣器蜂巢形ノ臺

三合入廣口聚氣瓶四箇添

八十錢

○石燒ノ皿三箇

一元二十錢

第十七、三合入ノ液洗瓶リ形塩化

カルシユム管ニ箇酸化銅

ヲ入ル、ニ用牛ル所ノ固

第廿九、キ玻璃管ノニニ掛キルハ同  
一元

第卅、ハオンノ区ノ入ル栓ノ附ルトル区  
八十錢

第卅一、ニ箇ノ入ル、ハ同  
一元

第卅二、レトル区ノ入ル、ハ同  
一元

第卅三、蒸氣皿十六、オンノ区ノ入ル一箇  
一元五十錢

第卅四、オンノ区ノ入ル一箇、ハ同  
一元

第卅五、直徑二十ノ玻璃漏斗二箇  
一元

第卅六、濾紙百枚、ハ同  
六十錢

第卅七、馬背形磁鐵一箇  
三十錢

第卅八、小刀一挺  
二十五錢

第卅九、七五寸角ノ錢網一枚  
十五錢

第卅十、鍍盆一枚  
一元

第卅十一、四十ノ試管十二本  
三十錢

挾及試管臺添  
三十錢

○吹管一本、鑪三角形及丸形  
五十錢

各一本  
五十錢

○玻璃管半斤、キユルノ区ノ栓二十  
五十錢

四箇  
五十錢

試藥類

藥品

量目

硫酸

四「ポンド」

五十錢

硝酸

三同二十

八十錢

塩化水素

二同

五十錢

石灰水

一「バケツ」

一元三十錢

アムモニア水

四オンス

三十錢

苛性「ポッター」

四同

一元

炭酸「ソーダ」

四同

一元

「クロウム」酸「ボタシユム」

四同

十五錢

「ソワレヤシ」  
「ボタシユム」

四同

二十錢

硝酸銀

同

四同

「リトマ」

同

四同

「インヂ」

同

四同

塩化「カルシユム」

八同

大理石

八同

鏡ノ鏡粉

八同

石灰

四同

石膏

四同

粘土

四同

漂粉

四同

二酸化マンガン

一「ボンド」

ソウダ結晶

四「カンス」

明礬

四同

硫磺竿

四同

同花蘇俵

四同

硝石

四同

亞鉛

二同

銅鍍屑

二同

酸化銅

二同

硫酸銅

二同

アンチモニー

三同

水銀

二同

酢酸鉛

二同

菓麻子油

二同

苛性ソウダ塊

二同

無水炭酸ソーヂム

一同

黄色燐

一同

赤色燐

半同

酸化錫

半同

酸化水銀

半同

木夕シエム

一「ド」ラム

酒分エム

一同

金箔

六枚

「マ」グ子シエム線

半「ヤ」ル

「ト」マス「ス」試験紙

一綴

木炭

一片

箱右ノ藥劑箱入ニテ代價二十元

「ル」ミ「ニ」エム

錫同

鉛

銀同

鍛鍊

鑄鍊

鋼鍊

亞鉛ヲ鍍著シタル鍊

鍊ノ荒鑛

酸化鍊

硫酸鍊

青銅

真鍮

粘土

錫ノ荒鑛

硫化鉛

硫化亞鉛

白砂

赤砂

火石

「ル」ツ

石墨

山塩

硫酸「ソ」チエム

硝 ソダガユム

石灰石

炭酸 ホツタシユム

白鉛粉 硫

金密陀 硫

右ノ見本三十三品代價八元

目錄終

骨炭 ソダガユム

硫酸 マク子シユム

塩素酸 ホツタシユム

鉛丹

明治十五年九月十五日及刺御届  
同 年十一月刺成發兌

定價金三拾錢

翻刻人

大阪府平民

塩 冶 芳 兵衛

東區北渡辺町四十六番地

製本發兌所

大村安兵衛

淡路町貳丁目

弘通

書林

榎原喜兵衛

松村九兵衛

前川善兵衛

花井野助

梅原龜七

the 1990s, the number of people in the UK who are aged 65 and over has increased from 10.5 million to 13.5 million, and the number of people aged 75 and over has increased from 4.5 million to 6.5 million (Office for National Statistics 2000).

There is a growing awareness of the need to address the health care needs of older people, and the need to ensure that the health care system is able to meet the needs of older people. This has led to a number of initiatives, including the development of the National Health Service (NHS) Plan (Department of Health 2000) and the National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002).

The NHS Plan (Department of Health 2000) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.

The National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.

The National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.

The National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.

The National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.

The National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.

The National Health Service (NHS) Act 2002 (Department of Health 2002) sets out the government's strategy for the NHS, and includes a number of initiatives aimed at improving the health care of older people. These include the development of a national strategy for older people's health care, the development of a national framework for older people's health care, and the development of a national network of older people's health care services.